
巡り回る環。

Irinias

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡り回る環。

【Zマーク】

Z7959Z

【作者名】

IrriRias

【あらすじ】

とある依頼を請けた青年の、
長い歴史の中では些細な事かもしけない

そんな物語。

ファンタジーとSFが混ざったような世界です。

戦闘描写はぶっちゃけ下手です。

更新はかなり不定期です。何か思いついたら適当に書く程度。
矛盾点多し。自分で設定を細かく書かない所為ですが、見つけたら教えて下さい。「」めんなさい。

Chapter 0 物語の、始まり。（前書き）

初投稿です。余り小説を書いた試しがありませんので、面白くないと思った方はすぐにブラウザを閉じて下さい。建設的意見は大歓迎ですが、悪意だけの意見はお断りしています。

Chapter 0 物語の、始まり。

『何故自分だけがこんな目に遭わねばならない』

人ならば必ず一度は思った事があるはずだ。自分に襲い掛かる理不尽、不条理に対しても。

だがいくらかのような事を思おうがこの世に神様なんてモノがいるはずも無く。

次第に『諦め』が生まれて行き、どんな事であろうと大体は受け入れてしまうようになる。

それが自分の『運命』だと信じているからだ。現実を直視するのがつらく、逃げの道を選んでしまう。

そしてそれは次第にある疑問を浮かばせるようになる。

『自分の生きる意味は?』

もしくは

『自分の生まれて来た意味は?』

だが、いくら考へても答えは浮かばない。

何故ならば、それは死ぬ間際になつて分かるモノなのだから

「……まあ、哲学なんて俺の趣味では無いが」

暇潰しに買った本を読み終え、ベッドに投げ捨てる。そして、椅子から立つと台所で朝の朝食を作り始める。

レシピ通りに鳥肉を焼き、少しアレンジをしてバターを少々入れる。すると、バターの風味と肉の焼けた良い匂いが部屋中に広がった。皿にサラダを乗せ、その上に鶏肉をのせる。

そして 錆の中にある
畠の死り物ではあるが
シチーは少
を入れた。

メインと野菜、スープが出来上がった事を確認すると主食である買つて来た二つのパンを皿の上に乗せる。

そして、テーブルの上には鶏肉のソテーとシチュード、パンと紅茶が置かれ

一人手をあわせて一礼した後食べ始める。朝から食べるものにしては少々重たい気もするが、若い上に男でもある彼にとつてはそれ程苦にはならなかつた。

10分程で完食し、皿洗いを手早く済ませソファーの上にある長いケースを空けた。

そこにはスナイパーライフル一丁と、二つの拳銃が入っていた。

スナイパーライフル『L96A1』。かつて千年前以上に『イギリ

ス』と言つ

今は存在しない国の会社が開発し、最近になつて技術復元で作られた新型のスナイパーライフルである。拳銃の方は『Deseret Eagle』、『イギリス』と同年代に存在していたと言つ

『アメリカ』の会社が開発した拳銃で、威力は当時世界トップクラスを

誇つていたと言つ。『L96A1』と同じく最近になつて復元された代物ではある為

これもまた最新クラスの拳銃だ。

『L96A1』を背中に背負い、ホルスターに『Deseret Eagle』を入れて

長年愛用している近接武器でもある刀 銘は『燐雲』と言つりし

い。

その『燐雲』を腰に差した。

そして、準備が出来た事を確認すると医薬品や非常用食料を鞄に詰め、鞄を手に提げた。

「あ、お仕事でも行つて来るよ」と

そう独り言を呴き、部屋を出た。無論、誰も返事する事も無いのだが。

階段から降りると、そこには体格の良い大男がいた。書類の山を相手取り、次々と高速でサインをしていく。相変わらずの様子に思わず苦笑してしまつ。

「おー、エヌマエル

そう呼ぶと、大男は椅子から飛び跳ねて、有り得ないモノを見たかのよひな
視線を向けて来る。

「あり得ないッ……！

お前が部屋から出て来るなんて……世界滅亡の前触れか！？」

「随分な言い様だな。俺とて仕事をしなければ金は減つて行く一方
だぞ……

まさか無限に金が出る訳でもあるまいし」

そう呆れたように言い返すと、大男 エヌマエルは得心したよう
な顔になつた。

「なるほどな・・・しかしあ、丁度良い所に来たな

「?どうこうことだ

エヌマエルがニヤリといかにも悪い顔をした為だらうか。とてつもなく嫌な予感がした。

「いやな、今から言つ依頼を請けられる奴がいないんだ。
丁度お前ならピッタリだらうよ」

「?まあいい、仕事ならさつさとくれ。

ただし特一級・紙幣一枚か、金貨百枚以上じゃなきや俺は請けない
がな」

「どう言つて、大男はますます笑みを浮かべ、依頼書を出す。

「セー、まあ説明しよう。今回の依頼者は皇国学院長の緊急要請でな。

『アルテミス』の生徒5名がこの地方で失踪した為、搜索願があつた訳だ。だが、今回の依頼はちと厄介でな

「どう言つて風に厄介なんだ？」

『アルテミス』と単語に朝読んだ本を思い出したが、すぐに頭の中から焼き消した。

「搜索願を出された直後、その5名の内4名を見つけたんだが。1名は行方不明だと言つし、おまけに帝政の連中が総出で狙つていろいろしくてな。その学生が重要人物と言つ事だらうが…」

「…」

「……なるほどな。つてお前、まさか

大男は正解！と言わんばかりの顔で言い放つた。

「まあ、早い話をお前に護衛を頼みたい。

うちのギルドで前衛の連中は総出で依頼を請けちまつてるしな。お前しか前衛クラスの 働きの出来る奴がない

「・・・おい、俺は奇襲戦闘専門だぞ。正面からの近接戦闘なんぞ専門外だ」

「だが、ギルドで統合部直属の上に上級ギルド員の資格もある。

腕も俺が見る限りは確かだ。皇国との関係悪化は避けたい。頼む、怜」

大男が手を合わせて頼むと、怜 今までにこの依頼を頼まれている青年は、しばし思案した。

怜と言う青年 織立怜は、ギルドに13歳で入りたつた一年で上級ギルド員の資格を獲得した所謂『秀才』の部類、いや『天才』に入るかもしれないギルド側からすれば稀有な人物だ。

だが、請ける依頼は戦闘スタイルとも関係するのだが、大抵『暗殺』と言った汚れ仕事しか請けられず、ギルド内では『卑怯者』と呼ばれ

孤立している。だが、ギルド総長であるエヌマエルは彼の才能を一番早くに見出し、以後怜の唯一の友人とも言える人物だった。

だが、それ以外の人間には気を許さず、ギルドでもパーティーを決して組まず、

依頼も護衛などの仕事は絶対に請けないと言う対人恐怖症に近い状態だ。

それ故に、この依頼を断ろうとしたが友人であるエヌマエルの頼みを断る訳にもいかなかつた。

「……分かつた。ただし、条件がある」

「！何だ！？」

「依頼主には顔を見せなくとも良いと言つ事。フードを常に被るし、マスクもするが依頼主にはそれでも良いか聞いて見てくれ。暗殺業をこれからも続けるなら顔を知られるのはどの道まずいしな」

そう言つと、Hヌマエルは苦笑し、仕方無いと嘆きのような表情で言った。

「それに関しては問題ない。事前に俺が聞いているからな。俺が信頼出来るなら良い、だそりだ」

「ほお、随分評価されているじゃないか」

Hヌマエルの手回しの早さに少し驚いたが、まあ長年の付き合こと言つ奴だろう。

「お前は俺をどう見てるんだ……まあいい、これが依頼主との合流地点だ。探索班が今は警護しているから、」の証書を見せて交代してくれ

「分かった」

そう言つて、証書を受け取つてギルドの出口から出ようとした。そこへ、Hヌマエルが声をかける。

「無事戻つて来いよ。今回は帝政の精銳部隊もいる。お前だから大丈夫だとは思うが……」

Hヌマエルが珍しく真面目な顔で心配してきたので、またも苦笑し

ながら手を振り
ギルドの外へ出た。

「……また、無茶しなきやいいが」

エヌマエルがそう呟いたが、誰一人聞いているものはいなかつた。

Chapter 0 物語の、始まり。（後書き）

次の投稿は年明けになる・・・。やうなならないような。余裕があれば今年中に。

設定集。（前書き）

簡単な設定集です。

『巡り回る環における大陸』
千年前にユーラシア大陸、アフリカ大陸、
オセアニア大陸、南北アメリカ大陸、その他の島が突然
急速に移動を始め、全大陸が接触してその後5百年の間に現在の形
となつた。

形は十字型のようになつてゐる。

【国名】

『神楽八洲皇国』

大陸東部に位置する大国。千年前には『日本』と呼ばれていた。
名門校である『アルテミス』が存在するのもこの国。

『レグラース帝政共和国』

大陸北部から西部にかけて存在する大国。
千年前には『ロシア』と呼ばれていた。

『エルシエント公国』

大陸南部に存在する国。帝政との戦争に敗れ、
現在属国となつてゐる。

千年前には『イギリス』もしくは『アメリカ』と呼ばれていた。

『クラッグベルン』

大陸中央部に位置する。

巡り回る環において主要舞台となる自治区。

砂漠地帯であり、傭兵協会や総合ギルドの本拠地が主におかれている。千年前のアフリカ大陸に当たる。

『グラッグベルンの詳細』

広大な砂漠が広がっており、各所にはオアシスが存在している。傭兵協会や総合ギルドの本拠地が存在する為、腕試しに訪れる者も多い。

また、遺跡が数多く存在しており各国の研究者の注目の的もある。ただし、治安は最悪で各國から第一級危険地帯に指定されている。

主に、この地域を舞台として物語が展開される。

『通貨』

世界共通であり、従来は銅貨が基本だったが現在は紙幣も流通している。

銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚となる。

金貨一枚で千年前の『日本』における『10万円』相当にあたり、紙幣は以下のランクが存在する。

特一級・紙幣・金貨100枚に相当。

一級紙幣・金貨50枚に相当。

二級紙幣・銀貨100枚に相当。

三級紙幣・銀貨50枚に相当。

四級紙幣・銅貨100枚に相当。

五級紙幣・銅貨50枚に相当。

設定集。（後書き）

物語が進むにつれ追加される予定。

Chapter 1 太陽と熱風（前書き）

第一話。何かそのまま勢いで書いてしまった。後悔はしていないはず。

Chapter 1 太陽と熱風

「暑い……」

そう咳き、水筒の水を飲む。

ここ数ヶ月、巨額の報酬を得てから部屋で本を読む生活しかしていなかつた為か、久しぶりの外はまるで地獄のようだった。

あれから ギルドから出た時はまだオアシスの近くでもあり幾場かマシな環境だつたが、ここは何しろ砂漠の真っ只中。うつかり道を間違えた日には一人寂しく砂漠で干乾びて死ぬ事になる。

「目的地までは、後何kmだ……？」

鞆から小型探索用のマップサーチャーを出す。

最近になつて帝政が開発した広域簡単地図を表示する機械で、現在位置と目的位置の座標を入力すると自動的に数値を表示してくれる。

「ざつと3000m……3kmか。後少しだな

そう言い、マップサーチャーを鞆に仕舞う。
そして再び、歩き出そうとした時だった。

まるで空から巨大隕石でも落ちてきたのかと錯覚する程の轟音と衝撃波が冷の全身を襲つた。

「クソッ、何なんだ！」

轟音のした方角はまさに、怜の向かおうとしていた場所の方向だった。

まさかとは思うが そう思いながら、走り出した。

すると、前方にいきなり大人数の兵士らしき服装をした集団が此方へ向かつて來た。数は30名程だろうか。

『我らはレグラース帝政共和国の部隊であるー

ー』により先は封鎖されている！すぐに引き返されたし！』

と、拡声器で一いち方に向けて言い放つた。

「……いつからこゝは帝政が取り仕切つて良い場所になつたんだ

そつ言つと、部隊長らしき男が一人歩み寄り 怒声を放つた。

「傭兵だか総合ギルドだか知らないが、乞食当然の奴らが我らに口を利くとは生意氣な！貴様等は命令に従つていればいいのだ！」

部隊長らしき男がそつ言つと同時に 僕は、その男を思いつきりぶん殴つていた。

「……何抜かしてんだ。戦争で負けていながら、その無駄なプライドだけは

健在のようだな、帝政のアホどもがッ！」

そう言つと同時に、バックステップをしながらオアシスの武器屋で

購入した

手榴弾を4つ、闪光弾を同じく4つ兵士の集団に投げ込んだ。さすがに熟練の兵士らしく、冷静に対応したのだが

従来の手榴弾や閃光弾とは違つ『衝撃作動式』だつた為、兵士達が
その手榴弾を蹴り
返そうとした途端、爆発した。

すると、雷が落ちたかのような眩い閃光と灼熱の炎のような爆風が
兵士達を襲つた。

ある者は失明し、ある者は足や腕を吹き飛ばされ、ある者は即死し
ていた。

だが、依然数が多く無傷の者が10名程残つていた。だが、味方が
やられ
パニックに陥つてゐる為か隙だらけだった。

そこへ、ホルスターから取り出した『Deserter Eagle』
の銃口を

兵士達に向け 引き金を引いた。

一発撃ち、二人の兵士の眉間を撃ちぬいた。

すると、残りの八名はようやく冷静を取り戻したらしく、こちらに
自動小銃を向けて来る。

(チツ、やっぱり近接戦闘は苦手だ)

そう心の中で愚痴を零し、遮蔽物の陰に隠れる。背中のL96A1
にカスタマイズを
施し、サーフティを外す。その間、僅か1秒。熟練の兵士に劣らぬ
スピードだった。

まず8名の兵士の内、一番左側の男に向けて照準を定める。
自動小銃でこちらに向けて撃つてくるが、自動小銃はしつかり狙わ
ないと

当たらない。そして、兵士達は半狂乱状態に陥つてゐる為弾が当たるはずも無かつた。

引き金を引くと、拳銃で撃つた時と同じように左側の男の眉間に弾が吸い込まれる。

それを見届けると、煙幕弾を2個兵士達に向けて投げ、逃走する。さすがに不意打ちだけでは本職の兵士には勝てない。そう判断した為だ。

10分程走り続け、兵士達の封鎖網の先へ行くと、そこでは学生の制服らしきものを身に纏つた4名と2人の……探索班だろうか。6名が5人に囚われていた。

(恐らく……あのが護衛対象と探索班だろうな。周りにいるのは……
帝政の聖典省の騎士と外交官、皇帝直属総隊……！？
それに、傭兵協会だと！？)

身を隠しながら様子を窺つが、やはりその光景が信じられない。皇帝直属総隊と言えば帝政の中でもエリート中のエリートが選抜されるし、

聖典省の騎士も皇帝直属総隊の騎士に劣らない実力を持つ。そして、外交官の男が何故ここにいるのかも分からなかつた。

おまけに、商売敵とは言え傭兵協会まで参戦しているとなると中々に手強い。

だが、躊躇している暇も無かつた。背中の『L96A1』を構え、差し当たつて一番脅威であろうアサルトライフルを持つ

皇帝直属総隊の騎士を狙つ。

そして、引き金を引くと 信じられない光景が目に入つて來た。
撃つた弾は確かに騎士の頭へと当たる……はずだった。

だがしかし、当たる直前に騎士が手を頭の前に突き出すと
高速で回転する弾を『撲んだ』。

そして、全員がこぢりこぢりつき 最悪な状況が、始まつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959z/>

巡り回る環。

2011年12月25日18時49分発行